

この世界で僕だけが  
透明の色を知っている

糸鳥 四季乃 Itou Shikino



アルファポリス文庫

## 第一章 光の彼女

ただひたすら、スケッチブックに鉛筆を走らせていた。

「れーん」

窓の外を見て、手元を見て、また窓の外を見る。忙しなく視線を移動させ、真っ白だったページに対象物を写し取る。黒い線を駆使し、アスファルトを踏むほっそりとした脚を、口元に運ばれる白い手を、隣を歩く友人に笑いかける瞳を、風に揺れる真っすぐな髪を、表現する。街路樹が時々邪魔をするのにももう慣れた。どこまで描ける。間に合うか。

「れーん。起きなさい」

やがて道路脇に植えられた、満開のソメイヨシノに吸いこまれるようにして、僕の視界から彼女は姿を消した。同時に手を止め、スケッチブックを見下ろす。また今朝も、彼女になりそこなった絵を一枚増やしてしまった。

もう一度窓に目をやる。彼女はいなくなったが、代わりに白い小さな花びらが、ガラスの向こうに一枚貼りついていた。それをついと、指でなぞる。触れそうで、触れない。透明な

板は常に僕と彼女の間に存在していた。

「れーん！ 朝ご飯できたってば！」

階下から僕を呼ぶ姉の声は、どんどん大きくなっている。これ以上待たせると機嫌が急降下することがわかっている。「起きてるよ」と返してスケッチブックを閉じた。

小さな出窓に無理やり押しこめていた身体を脱出させる。高校に入学した途端、たけこのようにぐんぐんと伸びた身長で、ここで日課のスケッチをするのも厳しくなってきた。

西向きに位置する僕の部屋は、窓が小さいのもあり快晴の朝でも薄暗い。無造作に積み上げられたキャンバスや、床に散らばる彼女のなりそないが描かれた画用紙。点在する鉛筆や筆や絵の具。それらを踏まないよう、つま先立ちでよたよたとドアに向かう。

「蓮！ 起きろって言うてるでしょ！ また学校休む気!？」

とうとう怒鳴り声に変わった姉に「いま行く」と返事をしながら部屋を出る。ドアを閉める前に、伸びぎみで寝ぐせだらけの頭をかきながら振り返った。

出窓から光が差し込んでいる。その透明なガラスの向こうで、ソメイヨシノが春風に吹かれ、季節はずれの雪のように白く舞っていた。



銀色の自転車にまたがり、地面を蹴った。重たいペダルを漕ぐと、制服のズボンが食いこむのを感じる。

身長が伸びすぎたせいで、学ランは袖も裾も丈が足りない。多少不格好だとは思うけれど、買い替えるほどでもないのですのままで。どこかが破れでもしない限りは、卒業まで着続けることになるだろう。

家の前の狭い一般道路から脇に伸びる坂を下ると、サイクリングロードに入る。札幌市白石区と北広島市を結ぶ、長い長い自転車歩行者専用道路だ。

ソメイヨシノやエゾヤマザクラの花びらが降り注ぐ中、緩やかなスピードで自転車を走らせる。ジョギングをする人や、犬の散歩をする人、それから花見の見物客が多く、万が一にもぶつからないようにとても気をつかう。サイクリングロードと呼ばれているのに自転車乗りは肩身が狭い。いや、もうサイクリングロードとは呼ばれていないんだっただか。名称が変わったのはこの肩身の狭さが理由かもしれない。

彼女も今朝、ここを通ったはずだ。白い花びらを踏みながら、この先にある公立校へと向

かう彼女を頭に描く。

小中高と、同じ学校に通った。学年は僕がひとつ上だけど、家が向かいにあったので小さい頃は仲が良かった。学校から帰るとお互い約束もせず芝生の土手を駆け下りた。サイクリングロードやその脇のベンチで遊んだ日々は、すぐ目の前の景色に投影できるほど、鮮明に記憶に残っている。

彼女の記憶からはとつとく消え失せているだろうけれど、それでよかった。ひとり占めしたそれを、誰にも奪われることがないようしっかりと抱きかかえて今日まで歩いてきた。

サイクリングロードを離れ、家を出てから十分ほどで高校の駐輪場に到着する。自転車を停め生徒玄関へ向かう途中、上から楽しげな笑い声が降ってきた。

顔を上げた先にいた彼女に、伸びた前髪の間から視線を送る。上の階にある教室の窓辺で、友人たちに囲まれた彼女が笑っていた。

久しぶりに正面から彼女を見た。

黒目がちで大きな瞳が、瞬きのたびにきらりと光る。長い黒髪が風に揺れ、柔らかそうな頬を、桜色の唇を、隠しては見せることを繰り返す。彼女の周りにだけ、より鮮やかに見える特別なエフェクトがかかっているかのようだ。

いまスケッチブックが手元がないのが悔やまれる。せめて目に焼きつけて、家に帰ったら

脳内写真を頼りに描こうとじっと見上げていると、突然後ろから誰かに飛びかかられた。

「おーっす、松山！ 今日おはちゃんと来たな」

強引に肩を組まれたかと思えば、がしがしと頭皮を揉むように髪を乱される。

「でもひでえ頭だな、おい」

この無遠慮さと軽薄そうな声を持つ知り合いは、ひとりしかない。

「伊達……おはよう」

「朝だつーのに、辛気くせえツラしてんじゃねえよ！ しゃんとしろ！ 背筋伸ばせ！」  
バシバシ背中を叩かれて、僕はむせる。白い歯を見せニツと笑う色男に、近くにいた女子たちが黄色い声を上げた。それに気付いた伊達は、二割増しで笑顔を輝かせ彼女たちに手を振る。パーマがかかった茶色い髪が朝陽に照らされ金に透けて見えた。

「相変わらずだな」

「なんだよ。お前もこれくらい愛想よくしねえと、いつまで経っても童貞捨てらんねえぞ」  
だとしたら、僕は一生童貞だろう。伊達のようにできる気がまるでしない。

伊達は同じ中学出身だが、話すようになったのは高校に入ってからだ。中学の頃から目立つ男で、常に人の輪の中心にいた。

父親が芸能畑出身の政治家で、テレビにもよく登場する人物だというのも多少は影響して

いるかもしれないが、ほとんどは伊達自身の人柄によるものだ。自信家で女好き。勉強も運動も人並み以上にできて発言力があり、周りを巻きこむのが上手い。

見た目も中身も派手なこの男と、まさか高校に入って仲良くなるとは夢にも思わなかった。しかも同じ部活の仲間になるなど、誰が想像できただろう。

「せめて髪切れよ。そのうざってえ前髪のせいで陰キヤって言われてんだぞ」

「それ言ってるの、伊達じゃないか」

「そうだよ。脱童貞したかったら俺のアドバイスをありがたく聞けっつーの」

彼女をとつかえひっかえ、時には三股だつてする女好きの伊達はバカにするように言うど、真つ赤なスニーカーで僕の尻を蹴つた。そうしてたたらを踏んだ僕を、横からさつと支えてくれたのは、もうひとりの友人。

「朝からなんの話をしてるんだよ、伊達は。松山、大丈夫？」

大きな丸いメガネの下、くりくりとしたリスザルのような目で見上げてくるのは、僕や伊達のクラスメイト、二海だ。そばかすの浮いた頬は白く丸く、伊達と比べると少し幼く見える。早口の声は高めで、それも余計に彼を幼い印象にさせていた。

「ありがとう、二海」

「二海。てめえもだぜ。そのだつせえメガネやめて、コンタクトにしろよ」

「えー。俺はいいよ。メガネは俺の一部っていうか、アイデンティティーみたいなものだし。それにコンタクトつてちよつと怖くない？」

穏やかで人懐っこい小動物のような二海は、見ているだけで癒される。同意を求められたので頷いて返すと、嬉しそうに「だよねえ」と言われた。二海は人を癒すイオンみたいなものを発しているんじゃないかと、いつも思う。

「それより松山、立ち止まって何見てたの？」

何気ない問いかけにぎくりとする。上を向いていたところを見られていたらしい。二海が校舎に目をやって、それを追うように視線を上に向けた伊達がにやりと笑うのがわかった。

厄介な奴に気付かれてしまった。さつさと校舎に入ろうとしたが、再び肩を組まれ逃走を阻まれる。

「ははあ、なるほど。愛しの美晴ちゃんを見つめちゃってたわけね」

茶化してくる伊達を、ムツと睨みつける。

「いつ僕が愛しの、なんて言っただよ」

「あ、ほんとだ。あそこにいるの、茅部さんだね。さすが剣道小町。今日も眩しいくらい輝いてるなあ」

二海はからかうわけではなく、素直な感想を述べているだけなので気にならない。

確かに僕の幼なじみ、茅部美晴は比喩でなく輝きを放つ美少女だ。どれだけ大勢の中にも決して埋もれることのない、特別な存在。

幼い頃からそうだったはずだが、僕はそれに気付いていなかった。彼女の特異性を認識したのは、思春期に入ってからだ。

「三次元の光属性って感じだよな」

「属性……？」

「天使とか女神とか、そういう意味合いだろ。二海、松山にオタク全開なたとえ方しても通じねえぞ」

「あ。ごめんね、つい。そうそう、先週出た専門誌にまた彼女のインタビュー載ってたの、読んだ？ もう扱いがアイドルみたいだったよ」

「読んだ読んだ。美しすぎる剣道小町だったな」

雑誌の存在を知らなかった僕は、書店に寄る予定を頭に書きこんだ。

写真が載っていれば買おう。あくまでもデッサンの資料としてだ、と自分に言い訳をする。

「彼女、芸能事務所からスカウトされたって聞いたけど、それほんと？」

二海の丸い目は真つすぐ僕に向けられている。

「さあ。僕に聞かれても」

「なあ、松山。あんな奇跡の美少女と幼なじみって、もうそれだけで人生勝ち組じゃん？ なのにお前はなんだってそう頑なに陰キヤなわけ？」

心底不思議そうに言われても返答に困る。彼女、美晴と幼なじみだった事実を隠しこそすれ、勝ち組要素に感じたことはこれまで一度もない。当然恩恵に与かった記憶もゼロだ。

むしろ男女ともに好かれ、教師からの信頼も厚く、テレビや雑誌の取材まで来る彼女と幼なじみだったことを知られると、いらぬやつかみを受けるのがほとんどだ。だから彼女との思い出は誰に聞かせることもなく、胸にしまいこんでいる。

同じ中学の伊達は元々知っていて、二海にも何かの話の流れで知られてしまったが、ふたりとも言いふらさないでいてくれるのがありがたい。

「いやいやいや。松山は陰キヤじゃないよ」

「はあ？ 二海お前、そのメガネ度数合ってねんじゃねえの？」

「松山は陰キヤっていうか、芸術家なんだよ。伸びた髪もアーティストって感じだったかいし。俺と違ってオタクじゃないから喋り方も落ち着いてるし。物静かだなんていうか、ミステリアスな雰囲気あるんだよな」

わかってる。二海は人をからかうようなことは言わない。純粹にそう思っているから口にするということは、わかっている。

でも僕はそういう方面のことを言及されるのが苦手だ。バカにされているわけでもないのに、絵を描いていることについては誰にも触れてほしくなかった。美術部に所属している癖に、嫌なのだ。自意識過剰みたいでわざわざ言わないが、いまも心臓の近くをカリカリと引っつかれるような気持ちになっている。

わりとあからさまに眉をひそめたつもりだったが、長い前髪のせいか二海も伊達も気付かない。

「ミステリアスウ？ こいつのどこが？ ただの酒が飲めない酒屋の息子だろ」

「そもそも僕は未成年なんだけど」

「あとむつりつってのも足しとくか？」

「それはやめてくれ」

こういう時、伊達の無神経さがありがたいと思っていると、二海が上を向いて「剣道小町が手を振ってる！」と興奮したように言った。

「うお。まじだ」

僕と伊達も自然と上を見れば、確かに彼女が無邪気な笑顔でこちらに向かって手を振っていた。振られた手から、良い匂いのする鱗粉りんこなでもこぼれ落ちていそうだ。

そんなことを考えていると、伊達にけつこうな力で脇腹を肘で突かれた。

「ほら、桧山。さっさと手え振り返せよ」

「なんで僕が」

「なんでって、あれお前に振ってんだろうが」

「そんなわけないだろ」

だって僕らはもう昔のような関係ではない。幼なじみと一方的に僕が認識しているだけで、何年も会話すらしていないのだ。強いて言うとしたら、先輩後輩という、ありふれた関係でしかない。

伊達が納得していないような顔で何か言いかけた時、後ろにいた新入生らしき女子たちが短い悲鳴のような声を上げた。「やばい。美晴先輩手え振ってる」「先輩おはようございませう！」としゃいまだ様子で彼女に向かって手を振って、僕らを追い越していく。

「ほらね」

僕なわけがないのだ。伊達を押しつけ歩みを再開すると、ふたりも後をついてくる。

「なんだよ、つまんねえ奴だな。でもまあ、そりゃそうか。俺だってあんな規格外な美少女おいそれと近づけねえわ」

「高嶺の花ってやつだね。俺はもつと閨属性やみな子がいいかなあ」

「その属性ってのやめる」

「伊達が言う陰キャと一緒じゃん」  
なるほど、そういう意味か。ふたりのやり取りに内心納得していると、先ほどの新入生の集団の賑やかな声が聞こえてきた。その中から「昨日の夜、茅部先輩を見かけたの」と耳が彼女の名前を拾う。

「まじ？ どこで？」

「コンビニ。アイス買いに行ったら茅部先輩いて、私服も素敵だった」

「いいなあ。声かけた？」

「無理無理！ でもプリン買ってるの見ちゃった」

「プリンとか可愛い〜！ 差し入れたあい」

伊達と二海にもその会話は聞こえていたらしく、彼女たちと少し距離ができてから「ちょっと気の毒だな」と伊達が呟いた。

「確かに。目立っていうのも大変なのかもね」

「プライベートもあったもんじゃねえな。見られんのにうんざりしたりすんだろ？」

なぜか伊達がこちらを見て言った。

「……僕に聞いている？」

「お前以外に誰がいんだよ。幼なじみだろ？」

「だからそれは昔の話で、いまの彼女のことは全然知らないよ」

「全然ってこたねえだろ。小さい頃から目立ってたんだろ？ から、いっそ透明になりたいとか考えたりしてたんじゃね？」

「だから知らないって」

ぐいぐいくる伊達の顔を押しつける。伊達のコミュ力の高さはこの無遠慮さにあると思う。僕には鬱陶しいだけだが。

だいたい、伊達はこう言っているが、僕より伊達の方が彼女の気持ちを理解できるはずだ。伊達も父親の影響だったり、本人の華やかな性質だったり、彼女までとはいかずとも僕よりは目立つ人生を送ってきているのだから。

本気で嫌がる僕を見て、二海が「透明といえは知ってる？」と話題を変えてくれた。伊達と違って気遣いに溢れている。

「透明病の噂。聞いたことない？」

「どうめいびょう？ 何かの病気か」

「いや、都市伝説。だんだん身体が透明になっていって、最後には消えちゃうんだって」

「出たよ、オカルト部長のオカルト談義」

バカにするような伊達にも二海は怯む様子がない。オカルト研究部、通称オカ研の部長を



務める友人は、この手の話になると目の輝きと早口の勢いが増す。

「透明人間の映画とか漫画とかあるじゃない。誰の目にも映らなくなって、やりたい放題でさる。あれはこの透明病からきてるって言われてるんだよ」

「それを言ってるのはいったい誰なんだよ」

「それがはっきりしないから都市伝説なの！」

「つまり誰も言ってないんだろ。つーか透明人間って、存在自体消えるもんなの？」

「作品によるんじゃない？ 存在が消えるっていうのはアレだけど、ロマンだよね」

うっとりする二海には悪いが、自分の身体が透けて見えなくなるなんて恐怖でしかない。

伊達もピンとこなかったようで「そうかあ？」と首を傾げた。

「女風呂のぞくとか、そんなことくらい思いつかねえけど」

「うわ。そういう低俗な考え方、やめた方がいいよ。色々あるじゃない。首相官邸に忍びこんで国家の陰謀を暴くとか。石川五右衛門みたいな義賊になって、悪い権力者からお宝を盗み出すとか」

「壮大な話だな。でも透明になるだけで実体はあるんだろ？ 難しいんじゃない？」

バカにしながらも話に乗るのは伊達の優しさなのか、コミュ力の高さがそうさせるのか。とにかくオカルト知識を披露する二海が生き生きしているのはよくわかった。

僕はふたりのやり取りを聞きながら、先ほど見た彼女を頭の中のキャンパスに描く。遠い記憶の中で、手を振りながら土手を駆け下りてくる小さな彼女の姿と重なった。遠いふわふわの綿菓子みたいな声で「蓮くん」と呼ばれた気がした。



あまりの心許なさに、僕は身体の横にぶら下げた両手を意味もなく握ったり開いたりして時間を潰す。こんなにも落ち着かない気持ちになるのは、目の前にいる人のせいだ。

風いだ湖の水面のような目をキャンパスに向けているのは、部の顧問でこの学校の美術講師、八雲吉高。最近メディアで取り上げられるようになった、新進気鋭の風景画家だ。

パリッと糊のきいた白いシャツにネイビーのスーツを着て、癖のある髪を後ろに撫でつけている姿は、画家というより青年実業家といった雰囲気だ。一見近寄りたがいが、僕はもう彼の穏やかで物静かな人柄を知っている。それなのにふたりきりの時間と空間をこうも居心地悪く感じるのは、彼が見ている絵のせいだ。それは僕が部活中に描いたものだった。

日当たりの悪い美術準備室。いくつものキャンバスやイーゼル、それから青白い石膏像がところ狭しと置かれた室内は、少し僕の部屋の雰囲気と似ている。

扉ひとつ隔てた向こうにある美術室には、もう誰もいない。部活の時間は終わり、みんな帰った後だ。伊達は今日は不参加だった。気分屋なので参加しない日の方が多い。

準備室の窓際にある八雲先生の机には、ガラスの花瓶に生けられた白い紫陽花あじさいが飾られている。先ほど部活中に、アナベルという品種だと先生が語っていた。

紫陽花は花びらに見える部分は実は萼がくと呼ばれるもので、その内側にある小さな蕾つぼみのようなものが花びらだという。面白いが、僕はやはりまん丸い手鞠てまりみたいな部分全体を花だと認識してしまう。ポリウムのある紫陽花は、外で見ると華やかで明るい気持ちにさせてくれるが、薄暗い屋内ではひどく物悲しげに映った。

そしてその、涙をこぼすように白い夢を散らす姿が、八雲先生の持つキャンバスには描かれている。

「……松山くんは確か、美大を希望していたね？」

絵から顔を上げ、先生が確認するように問いかけてきた。

「はい、一応……難しいですか」

「いや、上手いよ。部員の中でも松山くんは飛び抜けて上手いと思う。試験は問題ないだろう」

上手い、という言葉は必ずしも褒め言葉にはならない。芸術で重要視されるのは、小手先

の技術よりずっと深部にある気がした。上手いと言われて情けない気持ちになるのがその証拠だ。僕が欲しかったのは、もっと別の言葉だった。そしてそれを八雲先生は知っている。

「そうですか」

「でも上手いだけなら、そんな奴は世の中にごまんといる……って、言いたげな顔だね」

なかなか意地の悪いセリフだ。でも相手が八雲先生だと不思議と嫌な気持ちにならない。

好き、だからだろうか。おこがましくも、はじめて会った時からなんとなく彼にシンパシーみたいなものを感じていた。

「確かに技術だけなら、学べば誰でもそれなりになれる。美大に入るのも君には難しいことじゃない。けれどその先は君にとって難関かもしれない。意味はわかる？」

「……創作の、壁にぶつかるといことですか」

「美大生の多くがぶつかる壁のひとつだ。大事なのは、何を描きたいか」

北海道の山奥にある故郷ばかりを描き続ける絵描きの言葉には、重みがあった。彼はもう一度僕の絵を見て、軽く首を傾げた。

「そろそろ、外で描いてみたらどうか」

「あまり……外で描くのは得意じゃないので」

「知ってる。でも松山くんは外で描くべきだよ。君のセンスは戸外でこそ発揮されるんじゃない

ないかと思うんだ」

先人の言葉は素直に受け入れた方がよい。頭ではわかっているけど、納得しない僕がいる。あなたは外の景色ばかり描いているからそう言うんだらうと、反発の音が内から聞こえてくる。

「美術部で外にスケッチに行く時も、君は頑なに拒否していたね。それはなぜ？」

「人に、見られたくないからです」

「見られたくないのは絵？ それとも描いている自分の姿？」

治りきらないかさぶたをべりべりと剥がされるような痛みと不快感を、手を強く握りこむことで誤魔化す。食いこむ爪に意識を集中してやり過ごそうとした。その間に心に強固な鎧をかぶせていく。

答えない僕に八雲先生は、聞き分けのない子どもを前にしたような顔で微笑んだ。

「桧山くんは、本当に美大に行きたいと思ってる？」

その問いにさえ答えられなくなったことで、自分を見失っていると改めて思い知らされた。

駐輪場へと歩いていた足の向きをくると変え、校舎の奥を目指す。胸にドロドロに劣化したオイルを流しこまれているみたいな気分だった。暗い穴へと落ちていく意識をどうにかしたい。そして唯一浮上する方法を僕は知っていた。グラウンドに向かうと、体育館に繋がる昇降口の扉が大きく開け放たれている。そっと中をうかがうと、白い剣道着を着た部員たちがふたり一組で竹刀を打ち合っているのが見えた。気合の入ったかけ声が、あちこちから響いてくる。

体育館の端には記者と思われる私服の男がふたりいて、ひとりにはカメラに練習風景を収めていた。きっと美晴の取材で来たのだろう。珍しいことではない。彼女は全国大会に出場する実力の持ち主で、かつ美しく、賢い。二海が言っていた芸能界からのオファーというのも、今朝はとほけたが恐らく本当のことだ。僕の姉も同じような話をしてきた記憶がある。

しかし記者の相手をしているのは彼女ではなく、剣道部の主将で僕と同級生の男子生徒、高良だった。

僕は美晴と付き合っているという噂の高良とは面識がない。この噂を仕入れたのは伊達だ。高良は武士のような雰囲気をもとう姿勢の良い男で、剣道着姿は凛々しく男らしい。美晴と並んでもあまり遜色がない。そういう男は珍しいので、噂は本当かもしれない。

彼女はどこだろう。視線を巡らせると、体育館のすみでひとり素振りをする彼女を見つけ。白の道着だけで防具はつけていない。頭の高い位置でひとつに結んだ長い髪が、動きに合わせてゆらゆら揺れている。

描きたい。ここが外ではなく、僕の部屋の中だったらいいのに。薄暗く狭いあの部屋でなら、思う存分彼女を描けるのに。

「……帰ろう」

穴に落ちた気持ちは浮上まではせずとも、底にぶつかる前に留まってくれた。あとはもう描くだけだ。

体育館に背を向ける。最後に見た美晴は、玉のように輝く汗を散らし、一心不乱に素振りをつけていた。揺れる長い髪のが先が、わずかに青く透けて見えた気がした。



カリッと鉛筆の尻を噛むと、独特の苦みと香りが口の中に広がった。額をつけたガラスから、冷たくじめっとした外の空気が伝わってくる。蝦夷梅雨と呼ばれる季節に入り、ここ数日は傘を常に持ち歩いていた。今朝もまた暗い花のような傘が、いくつも家の前を通り過ぎていく。

雨は嫌いではない。やまない雨音が余計な雑音を消して、世界にひとりきりだと錯覚させてくれる。いつも以上に部屋が暗くなると安心できた。ずっと梅雨が続けばいいのにとすら

思う。そうすれば、僕はオイルの匂いが染みついた居心地の好い部屋で、静かな時間を堪能できる。

濡れて歪む視界の端から透明な花が歩いてきた。それは僕の家の向かい側、美晴の家の前で立ち止まった。少しの間ありふれたビニール傘は家を見上げていたが、やがて他の花と同じように憂鬱ゆううつそうな足取りで去っていく。

あの傘の下にいたのは、いつも美晴と登校している女子生徒だ。中学から彼女と仲良くして、確か同じ剣道部に所属していたはず。

「またか……」

今朝も美晴は姿を現さなかった。昨日も、一昨日もだ。梅雨が来ると同時に、彼女はまるで僕のように引きこもってしまった。

いや、僕のようにと言うと語弊ごへいがある。僕は絵に集中して生活リズムが崩れ学校を休むことがあるだけで、決して引きこもっているわけではない。彼女にしても、きっと風邪か何かで体調を崩し休んでいるだけだろう。

蝦夷梅雨はそれほど長くない。青空が広がる頃には、きっと彼女もあの太陽のような笑顔を見せてくれるはずだ。

「それまで、これはオアズケか」

スケッチブックを閉じ、すでに物で溢れた机の上に置き、部屋を出た。

階段の途中で魚の焼ける匂いがしてくる。姉がバタバタと駆け回る音とお天気キャスターが今日の天気を知らせる声は、我が家の朝の日常だ。

居間に行くはまだヒゲを剃っていない寝起きの父が、ちゃぶ台の前で朝刊を読んでいた。僕が「おはよう」と声をかけると、ちらりと視線をよこし、ひとつ頷く。

広い肩幅に丸太のような太い腕。日焼けした肌にもつりと閉じられた口。短く刈られた髪と男らしい眉は真つ黒だ。まるでヒゲマのような見た目の父、松山武夫。松山酒店の三代目店主で、バツイチ子持ちのシングルファザー。これを言うと嫌な顔をされるので、僕も姉も本人の前では口に出さないようにしている。

「蓮、遅い！ たまには早く起きて手伝ってよね」

台所から現れた姉、百音が、僕を見るなり父に似た凜々しい眉をつり上げた。僕と同じく長身の姉は、長い足で畳を踏み抜かんばかりにドストドス歩いてくる。味噌汁を乱暴にちゃぶ台に置いた姉に「いつもありがとうございます」と手を合わせる。途端にお盆で勢いよく頭を叩かれた。まったく容赦がない。

「あんだ、また遅くまで絵描いてたでしょ。ちゃんと勉強してんの？」

元々鋭い目をさらに尖らせた姉に、視線が泳ぐ。

「してると言えば、してる」

「絵なんかで食べていけるわけないんだから、真面目に勉強して大学行きなさいよ。うちの店継げばいいって思ってるんだらうけど、甘いわ。お店をやるって大変なんだから」

朝から勢いよく説教する姉は、市内の大学の経済学部に通っている。そのうえで家事を担い、酒屋の事務仕事も手伝っているのだから、ただ絵を描いて学校に通うだけの身分の僕は反論しにくい。

それでもこれだけは言っておかなくてはならない。

「元々継ぐ気なんてないよ。酒苦手だし……」

勇気を振りしぼった主張は、姉のひと睨みで尻すぼみになった。

「だったらどうする気？ あんたもう三年生なのに、全然進路について話さないじゃない。今度三者面談あるんでしょ？ お父さんに何も知らない状態で行けって言うの？」

「そういうわけじゃないけど……父さん、本当に来るの？」

「ああ。でも配達の合間に行くから、ちゃんとした格好はできんぞ」

「ちゃんとした格好なんて、喪服くらいしか持ってない癖に。お父さんも行くって言うてるんだから、蓮は最低限の情報話しなさいよね」

男ってほんと大事なことに限って話さないんだから。そんな姉の愚痴に僕と父さんは肩を

すぼめながら箸を取るのだった。



それから一週間後の朝、学校に到着した僕は思わず校門の前で足を止めた。

駐輪場に自転車や校舎に向かおうとしていた僕の目の前を、美晴がうつむきがちに通り過ぎていく。

僕らの上には久しぶりの青空が広がっていた。

ただ、太陽みたいな笑顔はそこに見当たらない。いつもの輝きはなりをひそめ、その他大勢の中に溶けこんでいる。

どこにいても目立つ彼女だからこそその違和感に、創作意欲より心配する気持ちの方がふくらんだ。

「風邪、まだ治ってないのかな……」

「おーっす松山！ 今日も陰キヤってんな！」

眩いた直後、突然抱きついてきたのはお馴染みのふたりだ。伊達と二海が僕を挟んで両側に立つ。

「おはよう、松山。どうしたの、こんなところで立ち止まって」

「いや……なんとなく、変だと思って」

「変って何が？」

僕が黙って前を歩く美晴を見つめていると、ふたりも視線を追うようにそちらを見た。

けれど数秒後「で、何が？」と改めて聞かれ、僕は戸惑う。

いつもなら彼女の姿を見つけると、伊達なんかはすぐに幼なじみがどうのこうのとからかってくるのに、今朝はその様子がない。二海も僕にはよくわからない言葉を使って美晴を褒めたたえるところだが、無反応だ。

後ろ姿だから気付かなかったのだろうか。いや、彼女は後ろ姿でさえその存在感を發揮する。ただ、今朝はその存在感が気薄になっているのだ。

やはり変だ。あんなに元気のない美晴ははじめて見る。まるで萎れた花<sup>よ</sup>みたいで痛々しい。ひとりきりというのも気になる。いつだって人に囲まれ、陽だまりの中で生きているような彼女のそばに、いまは誰もいない。いつも一緒に行動している同じ剣道部の少女の姿さえない。ケンカでもしたのだろうか。だから元気がないのかもしれない。

元気のない花には水をあげるべきなのだろうか、僕にはできない。何年も言葉を交わしていない元幼なじみで、いまはただのご近所さんでしかない僕。

水のかけ方さえ、とうに忘れてしまっていた。

その後、昼休みに友人と連れ立って歩く美晴を見かけた。ケンカをしたわけではない。けれどやはり元氣というか、覇氣がなく、いつもの彼女ではないことは確かだった。

遠目にじっと様子を見てみると、ふと彼女が顔を上げこっちを見た。何かを求めるような、訴えるような目をしていた気がする。だが視線の先が僕であるはずがないので、不自然にならないようそっと別の方向に目をやった。

しばらくして目線を戻せばすでに美晴の姿はなかったが、どこか乾いたような彼女の表情が頭から離れなかった。

自分に何ができるわけでもないのにどうしても気になり、放課後また体育館をのぞいてみたが、美晴の姿は見つけられなかった。白い道着の剣道部員たちは普段通り声を上げながら練習しているのに、彼女だけがいない。主将の高良、彼女の友人もいる。病み上がりで本調子ではないから休んでいるだけなのだろうか。

ちよど「休憩ー」という顧問のかけ声で、剣道部員たちが竹刀を下ろし、バラけていく。「あ、あの……高良」

廊下に向かう高良が前を通ったので、つい声をかけてしまった。これまで挨拶すら交わしたことのない相手だというのに。

当然相手は驚いたように僕を見ただけれど、足を止めてくれた。

「ええと、桧山、だっけ。何か用？」

「あー……今日って、彼女休んでるの？」

「彼女？ 誰の？」

「誰のって、そりゃあ」

待てよ。彼女と高良が付き合っているというのは、あくまで噂だ。本当に付き合っているかどうかは知らない。彼女と目の前の男がそれらしく振る舞っている場面を、僕は見たことがない。

「もしかして、付き合っていない……？」

「なんの話だ？ 俺は誰とも付き合っていないけど」

男らしく整った顔をしかめる高良に僕は慌てた。休憩時間に話したこともない野郎から声をかけられ、おかしなことを聞かれても迷惑だろう。

「ごめん。質問を変える。後輩の茅部美晴は、どうして休んでるんだ？」

高良はますます眉をひそめ、僕の顔をじっと睨むように見つめた。

「さつきから何を言ってるんだ？　うちに茅部って名前の奴はいないぞ。それに今日は誰も部活を休んでない。ここにるので全員だ」

「は……？」

「誰かと間違えてるんじゃないのか？」

そう言うのと、高良は袴をばっさばっさと足でさばいて体育館から出ていった。

ここにるので全員？

体育館を見渡す。普段半分ほど閉じがちな臉をしつかり持ち上げ、目をこらした。それでもやはり、美晴は見つからない。

「どうなってるんだ……？」

ぐるぐると視界が回り出す。ふらつきながら逃げるようにその場を離れた。

正門への小道を歩いても、地面を踏みしめている感覚がない。まるでおかしな夢の中で、雲の上を歩いているみたいだ。

高良は誰とも付き合っていないと言った。茅部という名前の後輩はいない、誰も部活を休んでいない、とも。

まさか美晴は退部したんだろうか。だが、子どもの頃から神童と言われ全国大会で優勝経験もあり、さらには雑誌やメディアで剣道小町ともてはやされ有名になってきたいま、なぜ

退部する必要がある。

もしかして、休んでいた理由は風邪ではなく、選手生命を脅かすようなケガだったのか。

それとも部の人間関係が上手くいかなくなり辞めたとか。

ありえない話ではない。特に高良とは噂にもなっていた。本当に付き合っていたがひどい別れ方をしたというのなら、先ほどの高良の態度もわからなくはない。

「でも、なんだかまるで知らない人間みたいに言っただけか」

高良は彼女にフラれて、その腹いせで意地の悪い言い方をしたのかもしれない。

きつとそうだ。神様にさえ愛されているような彼女が誰かに嫌われるというのはなかなかないことだが、フラれたとするなら可愛さあまって——ということは大いにある。そういうことに違いない。

僕はひとり納得し駐輪場に入る。ずらりと並ぶ自転車から自分の銀色を探していると、突然何かが割れる音と悲鳴が聞こえた。

一気に騒がしくなった正門の方へ向かうと、校舎一階の窓ガラスが大きく割れ、生徒が集まってきた。

ボールか何かが当たったのだろうか。

その時、人だかりの後ろからぼんやりと眺めていた僕の目に、信じられない姿が映った。



割れた窓のそばに、彼女が立っていた。その手にはいつも練習で振るっている竹刀が握られ、挑むような目で集まってきた生徒たちを見つめている。

まさか、美晴が割ったのか？

ありえない、と思いつながらも僕は彼女から目が離せない。

品行方正で教師からの信頼も厚い彼女が、校舎の窓を割るはずがない。けれど、ひび割れ大きな穴がぼつかり空いたガラスのそばに、竹刀を持った美晴が立っている不自然さ。

それだけではない、美晴があの場合にいるというのに、誰ひとり彼女の名前を口にしないのだ。

美晴はしばらく竹刀片手に佇んでいたが、やがて諦めたように顔をうつむけると、野次馬から離れた。竹刀を袋にしまい芝生に置いていた学生鞆を手にとると、割れた窓ガラスを振り返ることなく門の方に歩いていく。

そしてやはり、彼女を呼び止める生徒は皆無だ。

僕は無意識に美晴を追いかけていた。背後で教師が到着した声が聞こえたが、我関せずといった風に歩き続ける彼女。僕は歩調を早め、手を伸ばす。

「美晴！」

すぐそばにある、シラカバの枝のように白く細い腕をつかんで引き寄せた。

「何があつたんだよ」

美晴のビー玉のように澄んだ瞳が、僕を映した。

このキラキラと深いところで光る大きな目に正面から見つめられるのは、いったい何年ぶりだろう。落ち着かなさと安心感に同時に見舞われ、不思議な気持ちになった。

こぼれんばかりに見開かれた彼女の瞳に吸いこまれそうになる。それまでの混乱を忘れ僕が見惚れていると、美晴は唇をわずかに震わせながら「蓮くん……？」と、僕の名前を呟いた。

その途端、満開のソメイヨシノのように身の内で咲き誇ったものは、喜びだ。

僕の名前を憶えてくれたのか。名前どころか存在すらとつくに忘れ去られていると思っていたのに。きつと勝手に避けるように疎遠になった僕のことなんて、記憶にも残っていないとばかり……

まだ美晴の中に自分がいたとわかり、虫の良い話だが、ひとつ年上の幼なじみのお兄ちゃんという立場が一瞬にして僕の中に戻ってきた。

「何か悩めるのか？ もしそうなら話くらい——」

「蓮くん、私が見えるの？」

僕の声を遮るように、美晴は身を乗り出しそう言った。

私が見え……なんだって？

彼女の整いすぎた顔をまじまじと至近距離で見つめた。シミやホクロひとつもない真っ白な肌は、新雪のように輝いている。遠くからでも強すぎる存在感を放つ彼女の特異性はわかっていた。けれど近くで見ると、ただただ人間離れした美しさに圧倒される。

神様が彼女のパーツをひとつひとつ慎重に置いて決めたのだ、と言われても驚かない。そんな神秘的とさえ言える美晴の姿を見もせず、スルーできる人間などいるだろうか。

「僕は、視力だけはいいんだ」

他に自慢できるところはないのだけれど。僕がそう言うと、美晴は顔をくしゃくしゃにし「何それ」と笑った。

その瞬間、長いまつ毛を濡らしこぼれた涙に、心臓をわしづかみにされたように感じた。割れたガラスと同じ無色透明が宙に舞う。優しい花のような匂いがふわりと香り、なんだか夢を見ている気分にはせられた。

泣いている彼女に抱きつかれたと気付くのに、随分と時間がかかった。

学校をあとにし、僕は美晴をファミレスに連れて来た。

長居できてゆっくり話せる場所が他に思いつかなかったからだが、学校の生徒に見られや

しないかと気が気ではなかった。

「あの、水、もうひとつください」

僕の言葉に若い女性店員は怪訝けげんそうな顔をした。

すぐに水の入ったグラスをもうひとつ持ってきたが、置いたのはなぜか僕の前。そこには先ほど席についた直後出してくれたグラスが、すでにあるというのに。

「ご注文がお決まりになりましたらお呼びください」

定型文を定型スマイルで口にする、店員はさっさといなくなった。変な客、とその背中と言っているように思わずムツツとしてしまふ。

「なんか、失礼な店員だな。入り口でも、おひとり様ですかなんて聞いてきたし」

最初は、によきによき伸びてしまったこの身長で美晴が見えなかったのかと思った。もしくは彼女がきれいすぎて、僕みたいな男の連れには見えなかったのかと。

けれどテーブルについてからもあの態度だ。メニューも僕だけに渡し、美晴の方は見もしなかった。

怒る、というよりも疑問を感じていた僕に、美晴は苦笑して追加されたグラスを引き寄せる。

「あれが普通だよ」

「普通なものか。嫌がらせとしか思えない」

「まあまあ。蓮くんが怒るなんて珍しいじゃん。私は気にしてないから落ち着いてよ」

珍しい、なんて、何年振りかで会話した相手に言われるとは思わなかった。まるで今日までずっと仲の良い幼なじみだったかのように言う彼女に、悪い気はしない。

「僕はもう小学生の僕じゃないよ」

「じゃあ蓮くんも反抗期の少年らしく親にイライラしたり、物に当たったり、怒鳴りちらしたりするの?」

「……もう反抗期って年でもない」

「反抗期なんてなかったんでしょ。やっぱり蓮くんは変わってないね」

変わっていないと言われると、美晴の中の僕がいったいどんな奴なのか気になった。

僕だって怒る時もあるし、だらけたり、学校をさぼったりもする。仲の良かった小学生の頃は、少なくとも学校をさぼることはなかったはずだ。

「美晴だって変わってないじゃないか」

「蓮くんにはそう見えるんだ?」

「違うの?」

「残念ながら、私はだいぶ変わっちゃったよ」

グラスのふちを指の先でなぞる美晴。その小さな爪の色や、さらりと流れる髪の毛の動き、まつ毛の作る影の濃さを頭の中のキャンバスに描き写す。

彼女を形作るものすべてを見ていたい。彼女を見ると手がうずうずする。これはもう癖とどうか、病気みたいなものだ。

「それは、さつき学校の窓ガラスを割ったことと関係があるのか……?」

状況から見て、あれは美晴の犯行ではば間違いない。

どうしてあんなことをしたんだ。危ないだろう。

僕が年上ぶって言うと、美晴は長い絹のような髪を耳にかけ、意味ありげに僕を見た。

白く細い指が、テーブルの上の呼び出しボタンを押す。すぐにあの店員が戻ってきて「ご注文はお決まりですか?」とまた定型文を口にした。

まるでメニューを見ていなかった僕は慌ててメニュー表を開き、たいして見もせずアイスコーヒーを注文した。

「美晴は?」

「は?」

なぜか店員が素っ頓狂な声を上げて僕を見た。

さつきからなんだ、と僕も強く見返すと、引きつった顔をして「以上でお決まりで

「しょうか」と言うので、これはいよいよ怒るべきかと腹のあたりに力を入れた。

「そんなわけないでしょう。彼女の注文がまだだ」

「……お連れ様をお待ちでしたら、後ほどまたご注文をうかがいにまいります」

「はあ？」

今度は僕が素っ頓狂な声を上げる番だった。嫌がらせなのか悪ふざけなのか。どちらにしても度が過ぎている。

「蓮くん、蓮くん。私もアイスコーヒーでいいよ」

「美晴はそれでいいの？」

「うん。いいから頼んで」

頼んでも何も、目の前の店員にも聞こえているだろう。

そうは思いつつも「アイスコーヒーふたつ」と渋々注文する。店員はますます奇妙なものを見る目をして注文を復唱すると、逃げるように厨房へと去っていった。

「なあ、この店出ようか？ あの店員の態度はないよ」

「いいんだよ。どこの店でも同じことになるだけだもん」

「どうして。美晴を無視するような奴、そうそういないだろ」

「いるの。っていうか、みんなそう。みんな私のことを無視するの」

みんな、というのが気になった。あの店員だけの話ではないのだろうか。

「……もしかして、学校でも無視されてるのか。それで最近元気がなかった？」

もてはやされることはあっても、美晴がいじめられることなんてまずありえないと思っていた。間違ってもそういうことをされる人間ではない。

誰もが好意を抱かずにはいられない種類の人間がいると、教えてくれたのは彼女だ。神様さえも魅了する存在が、茅部美晴なのだ。

「蓮くん、私のこと心配してくれてたの？ ずっと？」

しまった、と内心自分の口をふさぎなくなった。これではまるで、僕が常に彼女を見ていたと言っているようなものだ。僕のストーリーカーじみた観察行為がバレてしまう。

「い、いや。たまたま見かけて、なんとなくそう思っただけで……」

「うそ。知ってた？ 蓮くんてうそつく時、右の耳たぶ引っ張るんだよ」

「え。あっ」

言われてはじめて、自分が耳たぶを引っ張っていることに気付いた。

これが本当に僕の癖なら、小さい頃からやっていて、美晴はそれを今日まで覚えていたということになる。

恥ずかしいような、情けないような、くすぐったいような気持ちになりながら、そろりと

手を下ろす。美晴はそんな僕に微笑ましいものを見る目を向けてくる。これではどちらが年上だかわからない。

「あんまり見ないでくれるかな……」

「だって、嬉しいんだもん。蓮くんが変わってなくて」

「そのどろが嬉しいんだよ」

「私のことを心配してくれる、優しいお兄ちゃんのままだってわかったから。てっきり嫌われたと思ってたから、嬉しいの」

まさか、と首を振る。僕が美晴を嫌うなんてこと、あるわけがない。

「嫌いになんてなってないよ」

「でも蓮くん、中学生になつたくらいから急に私のこと避けはじめたでしょ？ 目も合わせられなくなつたし。私がしつこくまとわりつくから、鬱陶しくなつちやつたのかなって」

「ないよ、ないない。本当に。ごめん、そんな風に思ってるなんて知らなかつたんだ。鬱陶しいなんて感じたことないよ」

本当に悲しそうな顔をするから、また泣き出すのではと焦ってごめんを繰り返す。

そんな僕に美晴は細い肩をすくめて言う。

「しょうがないなあ。許してあげる」

「それは……どうも」

急速な喉の渴<sup>かわ</sup>きを感じ、水を一気にあおる。

グラスの汗で濡れた僕の手。それを正面から伸びてきた、白い陶器のような手がつかんだ。

「ねえ、蓮くん。私の手、見える？」

「は……？？ 見えるって、そりゃあ」

「本当に？ 全部見えてる？」

「当たり前だろ。何言ってるんだよ」

青くか細い糸のような血管が透けて見える手の甲、節が目立たない指の関節、ほんのり色づく桜のような爪だって、しっかりと見えている。本当に視力だけはいいのだ。

ただ、ツヤのある爪の先端が、わずかに透けている気がした。きっと僕と違って、少しの力で割れてしまうようなとても薄い爪なのだろう。

「でもね、本当は見えないはずなの」

「……なんだって？」

「手だけじゃない。腕も、足も、顔も、全部見えなくなってるの」

「見えないって……誰かそう言ったのか？」

「言わないんじゃないかって、言えないの。見えないことさえわからないから」

意味がわからない。なんの冗談だと言おうとした。その時あの店員が戻ってきて、銀のトレーからアイスコーヒーをふたつ、テーブルに置いた。躊躇なく両方とも、僕の前に。

「お待たせいたしました。ごゆっくりどうぞ」

再び早口で定型文を言い終えると、そそくさと去っていく。店の奥でこちらを見ながら他の店員と囁き合っている様子に、僕は口元を手で覆った。

鼓動の乱れを感じながら、ゆっくりと美晴に視線を戻す。

彼女は笑っていた。困ったような顔で、それでも笑っていた。

「蓮くん。私ね、透明人間になっちゃったみたい」

まさか、という言葉は喉につっかえて出てこなかった。この店に来てからだけではない、もう少し前から感じていた小さな違和感たちが集まって、恐ろしい答えを形にしていく。

汗っかきのグラスの中で、氷がからんと音を立てた。

なんだか感慨深い気持ちで、僕は茅部という表札を眺めていた。

美晴と疎遠になっていった時間と同じだけ、この家の戸を叩くことはなかった。距離で言えばたかだか十数メートル。お向かいさんのお宅を訪問するのは、こんなにも緊張を強いられるものだっただろうか。

「ただいま」

僕の異様な緊張をよそに、美晴は普段通りといった様子でドアを開け中に入っていく。

迷いながらも、僕は彼女に続いた。途端に鼻腔をくすぐった香りに、小学生の頃の記憶が呼び戻される。

懐かしい、ポプリの香りだ。靴箱の上に、白い花や葉が詰められたころんと丸いガラスの容器がある。確か美晴の母親が、ポプリ作りを趣味にしていたのではなかっただろうか。

彼女からする優しい香りの正体はこれだったか。

「本当に僕も上がっているの？」

「もちろん。前はよくお互いの部屋を行き来してたでしょ？」

「それは子どもの頃の話だろ」

「もしかして蓮くん、緊張してる？ 女の子の部屋に上がるからって、ドキドキしてる？」

「……年上をからかうのはやめなさい」

無邪気な美晴に、意識するのもバカらしくなって靴を脱いだ時、軽快な足音とともにセーラー服姿の少女がリビングの方から現れた。

一瞬、美晴かと思った。正確には中学生の頃の彼女と見間違えた。何せ美晴が当時着ていたのと同じ制服で、整った顔もよく似ていたのだから仕方ない。

「あれ？ 蓮くん？」  
「あ……どうも。久しぶり」

僕を見て目を丸くしたのは、美晴の妹、深雪みゆきだった。美晴の三つ下だから、いまは中学二年生か。ついこの間まで泣き虫で甘えん坊の小学生だったのに、月日が経つのは本当に早い。

「え、何？ いつ来たの？ いま？ インターフォン押した？」  
「インターフォン？ 押……さなかった、かもしれない」

美晴がいるのだから、押す必要をまず感じていなかった。深雪だって姉と一緒に姉の幼なじみが家に入ってくれば、姉が連れて帰ってきたと思うだろう。

つまり深雪には、美晴の姿が見えていないのだ。この玄関に立っているのは、僕ひとりきりで、僕の隣はぼつかりスペースが空いているように映っているのだ。

「何それ、うける。いくら幼なじみって言ったってさあ、もう私は十四で、蓮くんは十八じゃん？ 色々とその辺遠慮してくれないと困るんだよねえ」

そんな生意気なことを言いながら、深雪は二階に上がっていった。

ものすごい違和感に自然と眉が寄る。遠慮してくれないと、なんて言われるほど、僕と深雪の仲はそう深くない。美晴と遊ぶ時に深雪がくつついてくることは時々あったが、それだ

けだ。四つ年が離れていればそんなものだろう。

美晴とは幼なじみだったとはつきり言えるが、深雪は幼なじみの妹、というもつと距離のある関係だと僕は認識していた。

「……いまのつて、どういうこと？」

おそろおそろの問いかけると、なぜか美晴は不満げに僕を睨んだ。

「そういうことになってるみたい」

「全然意味がわからないんだけど……」

「私の存在がなかったことにされたんだよ。代わりに私の場所に、深雪がねじこまれたんだと思う」

美晴は軽く尖らせた唇を、親指で押し潰す。「この設定は予想してなかった」などとぶつぶつ言いながら、柔らかそうな唇をもてあそび続ける。

何か考えこんでいる横顔を見つめながら、美晴の唇は果物みたいだなとのんきに思った。

果実のように瑞々みずみずしく艶々つやいた唇に触れてみたい。弾力があるのか、柔らかいのか。絵にするならどんな色を置くか。

「蓮くん」

「はこっ」

名前を呼ばれて背筋がピンと伸びる。

唇ばかり見つめていたのがバシて怒られるのかと思っただけ、美晴は「行くよ」とだけ呟いた。何かに挑むようなピリピリとした声色だった。

僕の後ろに回ると、両手でぐいぐいと背中を押しはじめる。

「お、おい。行くってどこに」

「まず人の家に来たら、挨拶は基本でしょ」

「あ、そうか。僕、お邪魔しますって言っただけじゃないかも」

「蓮くんそういうところけつこう抜けてるもんね。人間関係だって挨拶からはじまるんだから、ちゃんとしないとダメだよ」

「すみません……」

年下にコミュニケーションの基本をダメ出しされ、反論ひとつできないとは情けない。選挙権だって持っているのに、僕の中身は小学生のままなのだろうか。

「まあ、蓮くんのエネルギーはほとんど絵を描くことに消費されてるんだから、他がポンコツになるのは仕方ないか」

「ポンコツはひどいな……っていうか、知ってたんだ？ 僕がまだ絵を描いてるって」

「知ってるっていうか、蓮くん昔から絵にしか興味なかったでしょ。鬼ごっこしてたのに、

いつの間にか地面に枝で葉っぱの絵を描いてたり、漫画は読んだことないのに画集はたくさん読んでたり。きっと私の幼なじみは、将来有名な画家になるんだって思ってたもん」

胸を張って言われると、むず痒くて気持ち悪い顔になりそうだ。

確かに僕は絵ばかり描いていた子どもで、いまもそれは変わらない。やはり中身はあの頃のままなのかもしれない。

「それに蓮くんの絵、見てるしね。美術部の作品、校内展示されてるでしょ？ いっちゃん上手だからすぐにわかるよ」

美晴の言葉にぎくりとしたのが、背中当てられた手を通して伝わってしまわなかっただろうか。

いつもの自分らしさを意識して「それはどうも」と答える。ここ数年のいつもの僕など彼女は知らないの、あまり意味のない努力だった。

「はい、がんばって！」

勢いよく押され、前につんのめりながら僕が入ったのは、茅部家のリビングだった。

食卓テーブルにソファアがひとつ。決して散らかっているわけでもない狭いわけでもないはずだが、ところ狭しと飾られている盾や賞状、トロフィーのおかげで雑然として見える。

僕がここに入っていた頃も美晴の功績を称えるオブジェはたくさん並んでいたが、あ



れからまた随分増えたようだ。違いと言えばそれくらいで、懐かしさがじわじわと、トロフィーたちの隙間からもれ出てくる。

「あらっ。びっくりした。蓮くん、来てたの」

「え……あ」

キッチンの方から出てきたエプロン姿の女性が、僕を見て目を丸くする。それは先ほどの深雪の表情とそっくりだった。

彼女たち姉妹の母親、奈津美<sup>なつみ</sup>さん。すらりとした美人で、昔は深刺<sup>はつらつ</sup>とした印象だったが、数年経って少し頬がこけ、やつれたように見える。ショートカットの黒髪にも白髪が多く混じっていた。

「久しぶりねえ。深雪に会いに来たの？ 呼びましようか」

「あ、いえ。さつき少し話したんで」

「ほんと？ あの子、態度悪かったでしょう。最近反抗期なのよ。ごめんさいね」

「いえ、全然——」

大丈夫です、と言いかけた僕の背中を美晴が突く。ちゃんとしろ、と言われた気がして背筋が伸びた。

「あの。お、お邪魔します」

「あら。うふふ、いらっしやい。改まってどうしたの？ ここは蓮くんの家みたいなものじゃない」

いまの奈津美さんの笑顔と、昔の奈津美さんの笑顔が重なる。年を取ったと思っただけで、温かく包みこむような優しい笑顔は変わっていなかった。

家に母親がいない僕にとって、奈津美さんは美晴とはまた違う特別な人だった。一番身近な理想の母親像で、憧れでもあり、勝手に母親の代わりのように思い慕っていた。奈津美さんもそれは感じていたのだろう。僕を邪険にすることはなく、実の娘とセツトのように扱って大切にしてくれた。

小学生の頃を思い出し、くすぐったくも温かい気持ちになった時、美晴が僕の後ろから出て奈津美さんの方へ歩いていく。

「お母さん」

はつきりと声をかけた。だが奈津美さんの視線は僕から離れない。

心臓をギュッと握りしめられたように苦しくなる。奈津美さんにも彼女が見えなくなっているのだ。なぜ、こんなことになってしまったのか。

「お母さん」

今度は奈津美さんの肩に触れ、声をかける。すると奈津美さんはハッと夢から覚めたよう

な顔になり、はじめて美晴の方を見た。

「……美晴？」

ひどく自信なさげに、奈津美さんが呟く。

美晴はまるで子どもを見るような目を自身の母親に向けて微笑んだ。

「ただいま。蓮くんと部屋にいるね」

「ああ……そう、そうね。そうだったわね。私ったらまた……ごめんなさい」

呆然とした様子の奈津美さんだったが、徐々に落ち着きなく視線をさまよわせはじめる。

混乱しているのは僕も同じだ。何がなんだかわからない。ただ、見ていることしかできない。

「謝らないでよ。飲み物はあとで取りに来るから」

うなだれる母親の肩を<sup>いな</sup>労るように撫で、美晴が戻ってくる。「行こ」と声をかけられ、彼女のあとに続きながら僕は奈津美さんを振り返る。

奈津美さんは顔を両手で覆いながら、震える声で「ごめんなさい」と繰り返し返していた。

年頃の女の子の部屋、という未知の領域に招かれ僕は立ち尽くす。

白いふわふわのラグの上に、似たような素材のクッションが置かれている。ここに座れば

いいのだろうか。それとも整頓された机に備えつけられたイスに座るべきか。いや、イスは一脚しかない。ならば腰かけるにはちょうど良い高さのベッドか。

座れるのか、僕は。あの小花柄のカバーがかかったベッドの上に。

「座らないの？」

イスに鞆を置いた美晴が振り返って首を傾げる。これでイスに座る選択肢はなくなった。

残るはラグか、ベッドか。僕は迷いに迷った末、ラグのない入り口前にできるだけ縮こまって正座をした。

床の硬さは関係なく、非常に居心地が悪い。アンティークっぽい金縁の鏡だとか、香水や化粧品の瓶、白いリースの飾りは実に少女の要素が強く、直視するのも躊躇<sup>ためら</sup>われる。おかげで僕の異物感がすごい。変な汗まで出てきた。

でも繊細なレースのカーテンが揺れ、風に乗って優しい香りが届き、少しだけ肩から力が抜ける。窓辺に丸いグラスに詰められたポップリがあった。彼女の母親が作った、彼女の香りだ。

「正座なんてやめて、好きなどころに座って楽にしていよ」

「い、いや。僕はここがいい」

「遠慮なんてされると悲しいんだけど」

## 立ち読みサンプル はここまで